

地域のニーズに応え、課題の解決に取り組むポイント

市内のコミ協や各地の事例から、運営や課題解決の取り組みに関する工夫を4つのポイントで整理しました。実際にどのように取り組むかは地域の状況や資源によって異なります。事例を参考に考えてみましょう。

ポイント1 人材を確保し育成する

「人手が足りない」「声をかけただけだと断られた…」とよく聞きます。新たな人材を誘うときは、何のために活動するのか、具体的になにをやるのか、参加するとどんな意義やメリットがあるかを見える化して伝えると共感が得やすくなります。

- 地域活動に参加する動機・参加したい理由**
- 地域が良くなる ● 暮らしが良くなる
 - 誰かの役に立つ ● 喜ばれたい ● 楽しい
 - 人との関係 (仲間づくり) ができる ● 成長できる
 - 地域のことかわかる ● 知り合いがいる
 - 頼まれた＝信頼されている、人柄や能力が認められている証!

あなたもこの動機で活動を始めたのでは?



本気で探していない「誘っていない」ケースも実はあります。事業に参加してくれた人は活動に関心があるかもしれません。感想やアイデアを聞くなどして関係づくりをはじめ、少しずつでも活動に参加するきっかけをつけてみましょう。コミ協役員には幅広いネットワークをお持ちの方も多く、地区内外問わず一緒に活動してほしい方を、まずはコソコソと誘ってみましょう。

人材育成・活動継続がうまくいくポイント

- (参加する人にとって) やることがわかりやすくなる ● 押し付けられない ● 助けがある
- 負担がない ● 否定されない ● 受け入れられる ● 認められる
- ほめられる ● 得意が生かせる ● 任せられる ● やりたいことができる

活動に関わるイメージを伝えよう



引き継ぎ書を見せるのもいいね!
5ページ参照

単発的でなく、継続参加や活動の担い手としての育成も必要です。担い手候補を信じて任せ、動きやすいようバックアップすることが大切です。

事例 角田地区コミ協

和やかな明るい雰囲気の中で、関わる人の自主性を尊重している。手伝ってほしいことはそれが得意な人に声をかける。居所や得意分野を生かしてさせているので活動が生き生きしている。若者や移住者にも積極的に声をかけ、活動に参加してもらっている。



意見やアイデアを言いやすい部会の様子

各事業は基本的に部会で立案して実施。部会メンバーは日頃から住民とつながってニーズを捉えているために、信頼してやりたいことを進めてもらっている。補助金申請も部会で行う。会長・事務局局長は調整役。

(各コミ協の声)

- 任せることが基本。口や手を出したくないが我慢。でも大切なことや守ることは伝える。
- ルールは単純化、仕事は明確化。
- 活動の参加者から徐々に育成。
- センター職員がことあることに若者に個別に声をかけ、活躍の場を設けている。
- 新人役員には仕事がある程度自由に任せ、周囲はアイデアを出して応援。力を発揮しやすくしている。
- 防災事業は女性目線の備えにも力を入れる。
- 地域の良さをわかってもらえたらそれが人材育成につながる。コミ協の事業が地域の良さを伝えることになる。
- 人とのつながりがしつかりと感じられるようにする。空き店舗・空き家を活用した移住は、地域の理解と支度があつたらうまくいった。

ポイント2 多様な主体と連携&役割分担する

コミ協活動に長年携わる経験豊富な人材は頼もしい存在です。ですが、いつの間にか「この人がいなくなったらできない」状態になっていませんか? 組織内外問わず多くの人が関われるような体制やしくみに転換することも考えていきましょう。多様な人や団体、企業と連携、役割分担することは負担の軽減、協力者の確保、次世代の育成につながる。何より活動のアップデートが期待できます。

活動の目的や関係する情報を共有し、誰でもできるようにしましょう。新たに実行体制を組む場合は、役割や任務も「見える化」すると動きやすくなります。

多様な主体と連携&役割分担のポイント

- 「誰でもできるように」任務と作業の「見える化」と「共有」
→ 助け合い、円滑な運営、引き継ぎにも役立つ
- 目的 (理念)、目標、方針の共有
→ 理解できると自分から行動を起こしやすくなる
- 各自の経験・専門性・得意を生かす Win-Win (お互いにプラス) の役割分担
→ 効果が高まり、継続しやすい。「関わる人」や「できること」が増える
- ゆるやかにつながる関係性を大切に
→ できる部分だけ関わるとOK! 負担しながら気軽な参加や協力を促す

手を取り合って住民ニーズや課題に向き合おう



事例

木戸地域コミ協

人口、面積とも規模が大きいため、地域内を3つのエリアに分け、担当役員を配置。経験豊富な事務局が実務面を支え、会長とエリア担当役員がリーダーシップを発揮している。自治会からコミ協、区自治協議会へなど意見を言い上げ、戻す仕組みを機能させ、区自治協議会にも積極的に提議している。



(※) 区自治協議会...市の附属機関

行政、社協、学校などの団体のほか、健康づくり活動ではスポーツ施設と、空き家活用調査では不動産会社などの民間企業とも連携。

(各コミ協の声)

- 役員会を通じて地域課題を吸い上げる仕組みがあり、各部会の情報も共有されている。
- 課題ごとにプロジェクトチームを構成。協力しながら進めている。
- 役員会の進行は専門部会が持ち回りで務める。ワガゴト化や内容の理解が進み、事務局の負担も軽減。
- 部会の枠にとられすぎない。
- コロナ禍の学童保育のためにオンラインで英語授業ができる人、口腔ケア活動で配布するお弁当を作るお店など、地域で活用できるスキルや資金がどこにあるかを考えて連携。コミ協は人不足でも、協働で負担を減らし、実現できる。
- コミ協の産業経済部には地域産業に関わる人がいるため、商店街や企業との連携が円滑。
- 頑張っている団体には、ある程度独立して活動してもらい、コミ協がサポートする。
- 自治会にも温度差がある。やりたくてもできない活動はコミ協が軸となってサポート。

ポイント3 活動をアップデートする ~活動の組み合わせで負担軽減と効果アップ&検証して質を高める~

少ない人数でも確実に実行するために、活動に優先順位をつけたり、共通点のある活動をまとめて、負担のないやり方に変えてみましょう。内容のマンネリ化や地域ニーズとのずれを防ぐため、関係者同士の対話で見直し(検証)、参加者など外部の意見を聞くことで、活動の質を高めてくれます。新しい取り組みには不安もあり勇気もいりますが、実験(お試し)という位置付けでやっても良いでしょう。うまくいかなければまた直せばいいのです。

完璧を目指さなくてOK! 小さく始めてみよう

